Hospital Report

三重県厚生農業協同組合連合会 松阪中央総合病院 内視鏡室

【住　　所】三重県松阪市川井町字小望102
【病 院 長】玉置 久雄 先生
【病 床 数】一般440床
【スタッフ】消化器内科常勤医5名、非常勤医3名（内視鏡指導医3名、専門医2名）
【内視鏡検査数】（平成21年度）上部消化管検査4,810例、下部消化管検査1,991例、ERCP 217例、EUS 145例
【保有スコープ本数】上部消化管用13本、下部消化管用8本、十二指腸用2本、超音波内視鏡用2本

最新の設備と技術を集結した内視鏡室で質の高い安全な内視鏡検査を提供

地域医療に重点を置いた中核病院として開業医の信頼に応える高度救急医療を提供

松阪中央総合病院は、平成16年3月に地域医療支援病院として承認され、また翌17年1月に地域がん診療連携拠点病院に指定されるなど、地域の医療機関と緊密に連携し、安全で質の高い医療を提供する中核病院として発展してきました。さらに、松阪地区の二次救急･小児救急拠点病院として機能し、救急患者･紹介患者を積極的に診療しています。

このような病院背景のもと、内視鏡室でも地域の開業医からの紹介患者が多く、疾患の精査を目的とした二次診療や専門性の高い検査や治療を提供しています。他施設の医師やスタッフとの連携を強めるため、院内で行う内視鏡検討会や病理研究会などの会合を地域の医療従事者に開放し、お互いの顔が見えるコミュニケーションの実践に努めているそうです。救急対応についても24時間オンコールで医師と内視鏡技師が待機し、必要な検査や治療を迅速に行えるようになっています。同院では診療科の垣根が低くコミュニケーションが緊密であるため、日々の診療だけでなく急患に対しても、他の診療科と連携して患者様に対する最善の処置を迅速に決定できる体制が整っているそうです。

最先端の機器と適切な人員配置で検査の効率化と安全性確保を両立

胃腸科医長･内視鏡室室長
直田 浩明 先生

増加する内視鏡検査に対応するため、同院では平成19年2月に内視鏡室の改装を行いました。3室ある検査室は個室化して患者様のプライバシーに配慮し、ハイビジョンカメラや特殊光、二酸化炭素送気装置などの最新機器を導入し、最先端の内視鏡診療を提供できるような体制が整いました。特に最近では、より精密な診断や治療に応用した超音波内視鏡検査を積極的に実施しており、検査数はここ数年で飛躍的に増加しています。同院の胃腸科医長で内視鏡室室長も兼務されている直田浩明先生は、「内視鏡室を改装した際に最も重視したのは、増加する検査に対応するため効率化を図るのと同時に、検査の質と安全性を確保することです。検査室は全てレイアウトを同一にしてスタッフや機器の配置を標準化し、手技がしやすいよう内視鏡モニターを術者正面にも配置しました。また、検査室の様子とモニター画面は集中モニタリングシステムで管理され、サポートが必要な場合はすぐにスタッフが対応できるようになっています。これは、若手医師に対する指導においても有用であり、また施行医や介助のスタッフも常に誰かに見られているという、程良い緊張感の中で日々の診療に当たることができます」とご説明いただきました。

Boston Scientific
Delivering what's next.™

看護師で内視鏡技師の資格を有する山田小百合さんは、「検査業務は全てマニュアル化し、一人ひとりの役割を明確にして業務を効率よく進めるようにしています。当院では、検査責任者を務める医師が1日の検査予定を把握して適切に人員を配置し、緊急で検査が入った場合もスタッフの振り分けを迅速に行うなど、検査室全体の指揮を執っていただいています」とお話になりました。このように、医師とコメディカルスタッフが連携して常に最新の情報を共有し、それぞれの役割をしっかり認識して診療に当たっていることが、検査の待ち時間短縮や安全性の確保といった患者利益の高い内視鏡診療の実現に貢献しているようです。

看護師･内視鏡技師
山田 小百合 さん

集中モニタリングシステム

患者様の安心のために徹底した感染管理を実践

患者本位の医療サービスを提供することを責務としている内視鏡室では、感染管理にも非常に力を入れています。内視鏡室のレイアウトは、患者様の導線とスタッフの導線を区別し、また使用前と使用後のスコープの導線が決して交わらないよう工夫されています。山田さんは、「内視鏡技師会で基本とされているマルチソサイエティガイドラインに則り、当院でも以前使用していた検査業務のマニュアルを全面的に作り変えました。最近では、内視鏡の洗浄履歴管理システムを導入し、検査の質保証をより確実なものにするよう努めています。また、毎日検査前に消毒薬の使用状態をチェックし、スタッフ全員が同じ情報を共有して業務に当たっています」とご説明されました。直田先生は、「患者様に安心して検査や治療を受けていただけるよう、処置具は可能な限りディスポーザブル化しています。リユース品は完全に洗浄できているかどうか判断がつかず、性能面でも一定の品質を保つことが難しいので、当院ではできるだけディスポーザブル製品を使用するように努めています」とお話になりました。

将来の内視鏡診療を支える優れた医療人を育成する

同院は昭和52年に臨床研修指定病院の資格を取得し、将来地域に貢献する優れた人材の育成を積極的に行ってきました。内視鏡室では、知識や技術の習得の前にまず医療従事者としての基本を身につけてもらうため、初期研修医に対して患者様との接し方やコメディカルスタッフとのコミュニケーションの取り方まで、きめ細かい指導をしています。直田先生は、「消化器内科領域を希望する若手医師に対しては、指導医がほぼマンツーマンでつき、技術の習熟度や個人の特性に合わせてじっくり教育しています」とお話になりました。また、直田先生はコメディカルスタッフに対する教育にも熱心に取り組んでおり、「全国で通用するような最新の知識や技術を身につけてもらいたいという思いから、内視鏡室で有名な施設へスタッフを見学のために派遣し、スタッフ間での交流を深めてもらっています」とご説明いただきました。このようにスタッフの成長をサポートする内視鏡室の体制は、「勤務先が変わっても内視鏡の仕事に従事したい」という人材を増やし、地域全体の医療レベル向上に少なからず貢献しているようです。直田先生には、「将来的には内科と外科の壁をなくすような治療手技が台頭してくるはずです。それには、麻複数の診療科や様々な職種を巻き込んだ有機的なチーム医療が内視鏡分野でも必要とされます。そのようなニーズに応えるためにも、コミュニケーション能力に優れた意欲の高い人材を育成し、患者様にとって最も望ましい医療現場の実現を図っていきたい」と、将来の展望について語っていただきました。

内視鏡室のみなさん

© 2010 Boston Scientific Corporation or its affiliates. All rights reserved.